

## フランス語歴史言語類型論の試み

今 田 良 信

### 0. はじめに

本稿は、近年一段と飛躍を遂げ、盛んに研究が行われている言語類型論に、さらに時間の経過に伴う言語特徴の変化を観察する視点を加味して、その枠組みで1つの言語（ここでは、筆者が主たる関心を抱いているフランス語）の様相を眺めてみようとする試みである。すなわち、同一の言語においてかなりの時間的隔たりを持った2つの体系である共時態間に見られる言語類型上の変化には、どのような種類の、また、どの程度の開きの相違が見られるのかを観察してみたい。但し、その際、同一言語内のことであるので、巨視的に(macroscopically) 比べるだけでは、基準となる項目に関する特徴の相違を感知できない（或いは、感知し難い）場合が多いのではないかと予測できるので、当然のことながら、微視的に(microscopically) も観察してみる必要があることは言うまでもない。そして、この作業を別の言語についても行い、2つ（以上）の言語の間でその結果を比べてみれば、「歴史対照言語学」とか、さらに調査言語数を増やし特徴の変化の型が見いだされれば、「歴史言語類型論」とでも呼べるような研究領域を展開させることもできるのではないかと考えている。本稿の題目に「歴史言語類型論」という術語を用いたのは、2つの体系を比べるために複数の基準（パラメータ）が必要な点と将来の展開を考慮に入れてのことである。そこで、その巨視的に比べる基準について、次節で説明することにする。

### 1. 比べる基準について

安藤(1987)では、英語を比較の対象として、23項目の基準について（必ずしも現代語だけについてではないが）日本語の類型論的な特徴が挙げられている。また、古浦(2008)では、安藤の基準に1つ追加して、24項目の基準について、日本語を比較の対象としたイタリア語（＝現代イタリア語）の類型論的な特徴が挙げられている。本稿では、最初の試みとして、これらを「巨視的に比べる基準」とする。これに対し「微視的に比べる」とは、1つ1つの「巨視的に比べる基準」をさらに細かく吟味する視点を指す。そこで、安藤(1987)と古浦(2008)を踏まえた上で、24項目の基準について、日本語およびイタリア語でどのように指摘されているのかを、筆者の判断に基づいた◎印か○印か●印〔◎は両言語の特徴が巨

視的にも微視的にも概ね共通の場合、○は巨視的には共通すると見なされるものの微視的には相違する事例が散見される場合、●は巨視的にも異なる場合]を添えて示してみると次の通りである。なお、必要に応じて※印の後に筆者の解説などを付すこととする。

1. 語頭に子音が2つ（以上）来るかどうか。  
●日本語は語頭に子音が2つ（以上）来ないが、イタリア語は2つ（以上）来る。
2. /r/音で始まる語があるかどうか。  
●日本語には/r/音で始まる語がないが、イタリア語には/r/音で始まる語がある。  
※日本語の指摘は現代日本語には当てはまらないが、本来の日本語である大和言葉には語頭の/r/音は存在しなかったとされる。従って、この事例は、上述の「歴史言語類型論的」に見れば、同一言語内において、類型上の変化が生じたものであると言えよう。
3. 母音調和が有るかどうか。  
●日本語には母音調和が有るが、イタリア語には無い。  
※この特徴は、古期日本語である上代日本語には認められるという説が有力であるが、現代日本語には、その痕跡は残っているものの、当てはまらない。従って、この事例も、基準2と同様に日本語内において類型上の変化が生じたものであると言える。
4. 開音節が基本的であるかどうか。  
○日本語もイタリア語も開音節が基本的である。  
※安藤(1987)も古浦(2008)も、表現としては「開音節が基本的である」とされているが、イタリア語には、cap-pel-lo, car-ro, an-ti-co<sup>1)</sup>などのように閉音節も散見され、「基本的」の中身が異なっているので○印とした。
5. モーラ言語か音節言語か。  
●日本語はモーラ言語であるが、イタリア語は音節言語である。
6. 母音の長短が音韻的に対立するかどうか。  
●日本語は母音の長短が音韻的に対立するが、イタリア語は対立しない。
7. 冠詞が有るかどうか。  
●日本語には冠詞が無いが、イタリア語には有る。
8. 名詞・代名詞に文法的性が有るかどうか。  
●日本語には名詞・代名詞に文法的性が無いが、イタリア語には有る。
9. 文法的な数が有るかどうか。  
●日本語には文法的な数が無いが、イタリア語には有る。
10. 関係詞が有るかどうか。  
●日本語には関係詞が無いが、イタリア語には有る。
11. S, V, Oによる基本語順はどうか。  
●日本語はSOV言語であるが、イタリア語はSVO言語である。

12. 主要語〔＝被修飾語〕（以下この〔 〕内は筆者による補足）と修飾語の語順はどうか。
- 日本語は「修飾語＋主要語」の語順になるが、イタリア語では「主要語＋修飾語」の語順が基本である。
- ※イタリア語の場合、品質形容詞のうち比較的短いものは主要語の前に置かれる傾向があるということで「～の語順が基本である」〔下線部筆者〕となっていることに注意が必要である。
13. 前置詞を用いるか後置詞を用いるか。
- 日本語では後置詞（＝助詞）を用いるが、イタリア語では前置詞を多用する。但し、後置詞も若干用いられる。
14. 動詞の変化は如何なる方法で示されるか。
- 日本語では動詞の変化は膠着法(agglutination)によるが、イタリア語では屈折法(inflexion)による。
15. 所有構文（＝「XガYヲ持ツ」型）を用いるか、存在構文（＝「XニYガアル」型）を用いるか。
- 日本語では存在構文が用いられるが、イタリア語では所有構文が用いられる。
16. 比較構文〔における「比較の対象」, 「比較級の補語」〕に何が用いられるか。
- 日本語では比較構文に助詞を用いるが、イタリア語では接続詞(che)または前置詞(di)が用いられる。
17. 疑問文が何でマークされるか。
- 日本語では疑問文は助詞でマークされるが、イタリア語では抑揚でマークされる。
18. 左枝分かれ構造(left-branching construction)の言語か右枝分かれ構造(right-branching construction)の言語か。
- 日本語は左枝分かれ構造の言語であるが、イタリア語は右枝分かれ構造の言語である。
19. 動詞が前向きに空所化(forward grapping)されるか後ろ向きに空所化(backward grapping)されるか。
- 日本語では動詞は後ろ向きに空所化されるが、イタリア語では前向きに空所化される。
20. 疑問詞が文頭に置かれるかどうか。
- 日本語では疑問詞は必ずしも文頭に置かれるわけではないが、イタリア語では文頭に置かれる。
21. 自動詞で構成される「迷惑の受け身」が存在するかどうか。
- 日本語には自動詞で構成される「迷惑の受け身」が存在するが、イタリア語には存在しない。

22. 数量詞(quantifier)を副詞的に用いるかどうか。

●日本語では数量詞を副詞的に用いるが、イタリア語では副詞的には用いない。

23. 主語(人称)代名詞が省略されるかどうか。

○日本語では主語代名詞は省略され、イタリア語ではしばしば省略される。

※「しばしば」の意味は、古浦(2008), p. 299 にも引用されているが、長神(1996), p. 37に「イタリア語の動詞(不定法以外の形態)は人称・数による語形変化がはっきりしているので、とくに主語を強調したりする場合を除き、主語人称代名詞は文中で省略されることがしばしばあります」〔下線部筆者〕ということを目指す。

24. 高さアクセント(pitch accent)を用いているか強さアクセント(stress accent)を用いているか。

●日本語は高さアクセントを用いているが、イタリア語は強さアクセントを用いている。

さらに、本稿では、言語類型上の歴史的変化を扱うので、基準をもう1つ追加しておきたい。

25. 名詞・代名詞について文法範疇としての格(case)が有るかどうか。

## 2. 古フランス語と現代フランス語の特徴の比較

本稿における歴史言語類型論の試みの対象は、フランス語であるが、その中における、かなり時間的隔たりを持った2つの体系としては、古フランス語(*ancien français*)〔以下AFで示す〕と現代フランス語(*français moderne*)〔以下MFで示す〕を比べてみることにしたい。但し、古フランス語については、特に発音、音節、アクセントなどに関する特徴について、当時の状況をそのまま再現することは不可能である。従って、主要な諸特徴について文法書等で一般的に認められている範囲でしかその判断ができないことを断っておきたい。なお、筆者の判断に基づいた◎印、○印、および●印の扱いについては、前節では2言語間であったものが、本節では1言語内の2つの体系間に変わるだけで、他は前節と同様である。

1. ◎古フランス語も現代フランス語も語頭に子音が2つ(以上)来る。

※例えば、AF: *croistre* 「増加する」、*splendor* 「豪華さ」；FM: *croitre* 「増加する」、*splendeur* 「豪華さ」

2. ◎古フランス語にも現代フランス語にも/r/音で始まる語がある。

※例えば、AF: *rose* 「薔薇」、*roge* 「赤い」；FM: *rose* 「薔薇」、*rouge* 「赤い」

3. ◎古フランス語にも現代フランス語にも母音調和はない。

4. ◎古フランス語にも現代フランス語にも開音節と閉音節があり、どちらか一方が基本的とは言えない。

※例えば、AF: *mar-chier* 「足で踏みつける、歩く」は2音節から成っている。Ray-

naud de Lage(1975), p.12が “L’ancien français est une langue relativement bien noté (...); aussi, en principe, toutes les lettres se prononcent. 「古フランス語は綴りがほぼ音に対応するという意味において、十分に表記された言語であり、(中略)従って、原則として、すべての文字が発音される。」〔訳文は大高訳(1981)による〕”と述べていることからすれば、最初の音節も後の音節も綴り字上および発音上の両方で閉音節と言えよう。FM: mar-cher「歩く」は、2音節から成っており、最初の音節は綴り字上も発音上も閉音節、後の音節は綴り字上は閉音節で発音上は開音節と言うことになる。

5. ◎古フランス語も現代フランス語も音節言語である。

6. ◎古フランス語も現代フランス語も母音の長短が音韻的に対立しない。

※現代フランス語については、倉方、他編(2000), p.1530に「フランス語にも母音の長短はあるが、日本語の/tori/(鳥)と/to:ri/(通り)のように、それによって意味の違いが起こることはない。フランス語の母音の長さは各単語に固有なものではなく音声環境(アクセントの有無, 母音の種類, 後続子音の有無と種類)によって自動的に決まる。」とある。また, Wartburg(1971), p.48によれば, 古フランス語についても, 既にその前段階である5世紀の俗ラテン語期に, 母音の音量(長さ)が音質(音色)に変化したと指摘されているので, 母音の長短は音韻的に対立していなかったと考えてよいと思われる。

7. ○古フランス語にも現代フランス語にも冠詞がある。

※それぞれに冠詞の区分としては定冠詞・不定冠詞・部分冠詞が存在する。しかし, その使われ方にはかなり大きな違いが見られる。例えば, 古フランス語の不定冠詞には現代語にはない複数形のuns(男性形), unes(女性形)が存在する。島岡(1982), pp.24-25には「古フランス語では不特定なものの複数を示すときは上記のように無冠詞がふつうだったが, 一定の集合体を示すばあいuns, unes が使用された。この集合体の中, とくに重要なのは一対の概念を表わすばあい, いわゆる両数duelを示すuns, unes である。」とある。また, 現代語と異なり, 古フランス語の部分冠詞は限定されたものの一部を指す。現代語ではこのような場合(例えば, FM: J’ai pris du pain qui était sur la table. 「私はテーブルの上のパンの一部 [= une partie de ce pain qui était sur la table] を食べた」)は, 逆にdeによる部分表現ではあるが, 部分冠詞ではないとされる<sup>2)</sup>。島岡(1982), p.25には「数的に数え得ないもの(物質)には不定冠詞は用い得ず, 古くは無冠詞で表された。また時には前置詞deだけで部分を示すこともあった。定冠詞が指示詞や所有詞に代って使用された時代には部分冠詞は限定されたものの一部だけを示し, 今日の慣用は13世紀以降, 定冠詞が普遍的意味 [= <量の総称> (非加算名詞が表わす物質の考え得る限りの総量)<sup>3)</sup>]を示すようになってから生れた。」と指摘されている。

8. ◎古フランス語にも現代フランス語にも名詞・代名詞に文法的性がある。  
※それぞれ男性・女性の区別が存在する。
9. ◎古フランス語にも現代フランス語にも文法的な数がある。  
※それぞれ単数・複数の区別が存在する。
10. ◎古フランス語にも現代フランス語にも関係詞がある。  
※それぞれ関係代名詞, 関係副詞などが存在する。
11. ○古フランス語も現代フランス語もSVO言語である。  
※両者をSVO言語と呼んでも問題はなかろう。古フランス語について, Marchello-Nizia(1995), p.82 は“Soulignons cependant que lorsque les trois éléments constitutifs de l'énoncé, sujet, verbe, objet, sont présents, l'ordre majoritaire est SVO. 「しかしながら, 文を構成する3つの要素, 主語, 動詞, 目的語がはっきりと現れている場合には, 多数派の語順は確かにSVOであることを強調しておこう。」”と述べている。しかし, それを取り巻く語順体系の状況は大きく異なる。古フランス語は, OVSをも含む, 文の第2位に動詞が来る動詞第2位文が最も頻度の高いものであり, その特徴であるのに対し, 現代フランス語は, 動詞活用語尾の実質的磨滅に代わって接頭辞的機能を担うに至った人称代名詞主語もその中に含んでSVが定置化された語順をその特徴と見ることができる<sup>4)</sup>。
12. ●古フランス語では「修飾語+主要語」の語順が一般的であるが, 現代フランス語では「主要語+修飾語」の語順が基本である。但し, それぞれ逆の語順も用いられる。  
※古フランス語については, Raynaud de Lage(1975), p.39 に“; cependant l'adj. épithète précède très généralement le nom. 「〔古フランス語においては〕しかし, 付加形容詞は非常に一般的に名詞の前に来る。」〔訳文は大高訳(1981)による〕”と述べられ, 島岡(1982), p.223 にも, 「〔付加形容詞の位置は〕古フランス語では名詞の前におかれることが多かった。ゲルマン語の影響によるものと思われる」と指摘されている。また, 現代フランス語については, 佐藤, 他(1991), p.95 に「フランス語では, 形容詞がその本来の働きをしている時, 即ち, 名詞のあらゆる事物について, 同種の他のものと異なる性質(*la ligne droite*直線/ *la ligne courbe*曲線)や, 置かれている状態(*la branche cassée*折れた枝)を示している時は, 名詞の後に置かれる。言い換えれば, 形容詞の原則的位置は名詞の後である。」と述べられている。
13. ◎古フランス語でも現代フランス語でも基本的に前置詞が用いられる。  
※但し, 位置だけを問題にするなら, 前置詞と同じ(語形の)語が, 品詞としては副詞に区分されるが, 後置詞的に用いられる例はある。例えば, FM: Il était(sera) parti trois jours *avant*. 「彼は〔その〕3日前に出発していた(いるだろう)」<sup>5)</sup>
14. ◎古フランス語でも現代フランス語でも動詞の変化は屈折法(inflexion)による。

※語根に語尾が付されて、古フランス語では、例えば、AF: *aim* 「私は愛する」、*aim-es* 「汝は愛する」、*aim-e* 「彼(女)は愛する」のように活用する。現代フランス語でも、基本的には同様である。但し、綴り字上は語尾が付されているものの、発音上は語尾が磨滅して発音されず同じになり、人称や数の区別ができないため、主語人称代名詞が不可欠で、事実上動詞の変化の一部を成している場合が多い。例えば、FM: *j'aime* 「私は愛する」、*tu aimes* 「君は愛する」、*il aime* 「彼は愛する」〔基準23の解説も参照のこと〕。

15. ◎古フランス語でも現代フランス語でも所有構文が用いられる。

※例えば、古フランス語の「私には武装した騎士が60人しかいない」や現代フランス語の「彼には友人が大勢いる」という存在構文は、AF: *N'ai que seissante de chevaliers a armes.* 「(直訳)私は武装した騎士を60人しか持っていない」<sup>6)</sup>、FM: *Il a beaucoup d'amis.* 「(直訳)彼は大勢の友人を持っている」〔いずれも下線部筆者〕という所有構文になる。

16. ○古フランス語では比較構文に接続詞(*que*)または前置詞(*de*)が用いられる。現代フランス語では接続詞(*que*)または前置詞(*à*)が用いられる。

※例えば、AF: *tu es plus fresche que n'est rose.* 「あなたは薔薇よりも新鮮だ」、*go fui plus petis de lui, et ses chevax maires dou mien.* 「私は彼より小さくて、彼の馬は私のより大きかった。」<sup>7)</sup>；現代フランス語で、それ自体にすでに比較の意味を含んでいる形容詞では、比較の対象である第2項は *à* で導かれる。例えば、MF: *Il est plus grand que son père.* 「彼は父親より背が高い」、*Ce roi est antérieur à Louis V.* 「この王はルイ5世より前の人だ。」<sup>8)</sup>

17. ●古フランス語では疑問文は倒置によってマークされるのが通例であるが、現代フランス語では(1)音調(文尾を上げる)〔=抑揚〕、(2)文頭の*est-ce que*、(3)倒置のいずれかによってマークされる<sup>9)</sup>。

※古フランス語についてはMénard(1988), p.105 に “Alors que la langue parlée moderne tend de plus en plus à mettre le sujet devant le verbe dans les interrogatives(*Est-il venu?* est souvent remplacé par *Est-ce qu'il est venu?*), en AF l'inversion du sujet nominal ou pronominal est de règle dans l'interrogation totale... 「現代の話し言葉は、疑問文において主語を次第に動詞の前に置こうとする傾向がある(*Est-il venu?*がしばしば*Est-ce qu'il est venu?*に取って代わられる)のに対し、古フランス語では、全体疑問〔=一般疑問(「はい」または「いいえ」で答えられる疑問)〕においては名詞主語あるいは代名詞主語を倒置〔すなわち上述の(3)〕するのが通例である”と述べられている。従って、「巨視的に比べる基準」で異なっていると判断されるので●印を付した。

18. ◎古フランス語も現代フランス語も右枝分かれ構造の言語である。

19. ◎古フランス語も現代フランス語も動詞は前向きに空所化される。
20. ○古フランス語では疑問詞は文頭に置かれるのが基本であるが、現代フランス語では必ずしも文頭には置かれるとは限らない。

※古フランス語については、Buridant(2000), p.691 に “Qu’ il s’ agisse d’ interrogation totale ou partielle, l’ ancien français peut focaliser le thème interrogatif en tête de proposition:” 「全体疑問であれ部分疑問〔＝疑問詞疑問〕であれ、古フランス語は節頭に疑問の主題を集中させる」と述べられている。現代フランス語については、亀井, 他(1992)の「フランス語」の項のp.801に「疑問詞を用いる疑問文でも、次のような形式は普通である。(中略) Tu vas où? 「どこに行くの」と指摘されており、会話表現の中では、疑問詞を文頭に置かないC’ est combien? 「おいくらですか」とかÇa fait combien? 「(全部で)いくらになりますか」とかいう表現もよく使われる。かなり大きな相違ではあるが、巨視的な基準から見て、位置の基本が異なるわけではないので○印とした。

21. ◎古フランス語にも現代フランス語にも自動詞で構成される「迷惑の受け身」は存在しない。
22. ◎古フランス語でも現代フランス語でも数量詞(quantifier)を副詞的には用いない。
23. ●古フランス語では主語代名詞はしばしば省略されるが、現代フランス語では省略されない。

※古フランス語については、Raynaud de Lage(1975), p.49に “L’ ancien français exprime peu le pronom sujet; à la deuxième et à la troisième personne en particulier, il s’ en passe sans difficulté, et surtout quand l’ ordre des mots ferait passer ce sujet derrière son verbe. De même, dans le cas de l’ impersonnel, il neutre ne s’ impose que lentement et nous avons encore des formules (《n’ importe!》 p. ex.) où nous ne l’ exprimons pas. 「古フランス語においては、主語代名詞が表現されることは少ない。特に2人称と3人称においては、語順によって主語が動詞の後に来る時には、とりわけ主語代名詞が省略される。同じく、非人称動詞の中性ilの使用は緩慢な過程をたどる。例えば、n’ importe! [「構うものか」(この訳文のみ筆者)]のような、今日でも見られる表現においては、ilが用いられない。」(訳文は大高訳(1981)による)”と述べられている。現代フランス語については、佐藤, 他著(1991), p.156は「主語(主格)人称代名詞は動詞の主語としてしか用いられず、また、動詞は名詞(・名詞相当語句)を主語としている場合を除き、必ず主語人称代名詞を先立てる。たとえば、aimaisは1人称(j’ aimais)でも、2人称(tu aimais)でもありえ、また、aimais, aimait, aimaientの発音が、いずれも同一であることがそれを示すように現代フランス語の動詞の変化は、そのみでは人称(時に性・数)を明示しえないからである。この意

味で、主語人称代名詞は、その本質において、動詞の変化の一部をなす「活用の代名詞」(pronom de conjugaison)と考えてよい。」と述べ、さらに「古語では、活用語尾が発音されていたため、それのみで十分に人称を示したから、主語代名詞は、特に主語を強調する時以外は、用いないのがふつうであった。」と述べている。

24. ◎古フランス語も現代フランス語も強さアクセント(stress accent)を用いている。  
※亀井、他(1992)の「フランス語」の項のp.786にも「古典ラテン語の高低アクセントは、俗ラテン語では、3世紀から6世紀の間に強弱アクセントへと変化した」とあるように、古フランス語は強さアクセントと考えられている。現代フランス語については、倉方、他編(2000)、p.1529に「フランス語ではアクセント(強勢)の位置が固定している。ひとつひとつの単語を独立して発音する場合は、その語の最終音節にアクセントが置かれる。アクセントのある音節(の母音)は他の音節よりもやや強く長めに発音される」とある。
25. ●古フランス語には名詞・代名詞について文法範疇として主格(cas sujet)と非主格(被制格)(cas régime)の2格の対立があったが、現代フランス語にはその格の対立は無い。  
※例えば、AF: murs「壁」(単数・主格), mur(単数・非主格), mur(複数・主格), murs(複数・非主格)。その後、非主格の語形だけが生き残って格の対立は消滅し、現代フランス語では、MF: mur(単数), murs(複数)となり、格機能のうち主格と対格は語順によって示され、与格や属格およびその他の格は、à やdeなどの前置詞を用いて表現される。

### 3. まとめ

前節での分析・検討を踏まえて、フランス語歴史言語類型論の試みの結果を指摘しておきたい。

(1)25項目の基準のうち、①◎印、すなわち古フランス語と現代フランス語の間で特徴が巨視的にも微視的にも概ね共通の項目は、1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 13, 14, 15, 18, 19, 21, 22, 24の17種(項目数全体の68%)である。また、②○印、すなわち巨視的には共通すると見なされるものの微視的には相違する事例が散見される項目は、7, 11, 16, 20の4種(項目数全体の16%)である。そして、③●印、すなわち巨視的にも異なる項目は、12, 17, 23, 25の4種(項目数全体の16%)である。両者は元々同一の言語内に属する時期の異なる共時態どうしであるから、◎印のものが項目数全体の7割近くであることについてはそれほど驚くには当たらないものの、○印や●印のものが3割を越えることについては、これをどう評価すべきなのかはもう少し考察の必要なところであろう。

(2)特徴の相違(変化)は、統語法を中心とした文法(冠詞、語順、省略、格など)に関わる基準項目に多く見られた。

今回は、試みとしてフランス語を対象とした歴史言語類型論的視点からの分析を行ってみた。今後は、基準項目の吟味や、なかなか容易ではなかろうが、同じ視点から見た場合の言語特徴の変化の一般的な傾向とか方向性、その中における今回得られた結果の位置づけなど、残された興味深い問題点についても考えてみたい。

#### 注

- 1) 菅田(1974), p. 43参照。
- 2) 佐藤, 他(1991), p. 66参照。
- 3) 同上。
- 4) 詳しくは, 今田(2002)を参照。
- 5) 鈴木, 他(1992), p. 141 参照。
- 6) Ménard(1988), p. 114 参照。
- 7) 島岡(1982), p. 32参照。
- 8) 倉方, 他(2000), p. 1550および鈴木, 他(1992), p. 78参照。
- 9) 佐藤, 他(1963), pp. 64-65参照。

#### 参考文献

- 安藤貞雄(1987): 『英語の論理・日本語の論理 — 対照言語学的研究 — 』, 大修館書店。
- 今田良信(2002): 『古フランス語における語順研究 — 13世紀散文を資料体とした言語の体系と変化 — 』, 溪水社。
- 亀井孝, 他(1992): 『言語学大辞典』, 第3巻(世界言語編 下-1)
- 倉方秀憲, 他(2000): 『プチ・ロワイヤル仏和辞典〔改訂新版〕』, 旺文社
- 古浦敏生(2008): 『日本語・イタリア語対照研究』, 文流。
- 佐藤房吉, 他(1963): 『フランス文法小辞典』, 駿河台出版社。
- 佐藤房吉, 他(1991): 『詳解フランス文典』, 駿河台出版社。
- 島岡茂(1982): 『古フランス語文法』, 大学書林。
- 菅田茂昭(1974): 『現代イタリア語入門』, 大学書林。
- 鈴木信太郎, 他(1992): 『新スタンダード仏和辞典』, 大修館書店。
- Buridant, Claude(2000): *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Ménard, Philippe(1988): *Syntaxe de l'ancien français*, 3<sup>e</sup> éd. revue et augmentée, Bordeaux: Bière.
- Raynaud de Lage, Guy(1975): *Introduction à l'ancien français*, 9<sup>e</sup> éd. revue et corrigée, Paris: SEDES. [大高順雄訳編『古フランス語入門』, 朝日出版社, 1981]
- Wartburg, Walther von(1971): *Evolution et structure de la langue française*, 2<sup>e</sup> éd., Bern: Francke Berne.